

# 韓国人日本語学習者の日本語の発音について

李 範錫<sup>1</sup>

## 1. はじめに

外国語を学習する際、学習者の母語が障害要因として働く、いわゆる母語の干渉は周知の通りであろう。母語の干渉は発音、文法、語彙など各方面にわたりおこりうるが、特に音声において母語の干渉による誤用が多いのは経験的に知られる。ここでは、韓国人日本語学習者の母語の影響による日本語の発音の誤用の例を紹介したい。

## 2. 韓国語を母語とする日本語学習者の日本語発音の誤用例

### 2. 1 韓国人日本語学習者における発音上の問題点

韓国人日本語学習者が日本語を学習する際、母語の影響により誤謬しやすい発音上の問題点として、しばしば次のような項目があげられている。

①母音の無声化 ②語頭・語中の無声破裂音の問題 ③語頭の有声破裂音の問題 ④「ツ」の発音 ⑤「ザ」行の「ズ」「ゼ」「ゾ」の発音 ⑥語中の「ハ行子音」の問題 ⑦促音の問題 ⑧長短音の区別・・・など

この中で、本稿では4つほどの項目を取り上げてみたい。

### 2. 2 日本語の無声破裂音の問題

日本語の「ハ行子音」/p/、「タ、テ、ト」の子音/t/、「カ行子音」/k/、この3つの無声破裂音/p, t, k/は、韓国語を母語とする日本語学習者にとっては難しい発音の一つである。

さて、韓国語にも日本語の破裂音/p, t, k/に類似する破裂音が存在する。しかし、日本語と違って意味弁別に関与する音声的特徴が異なる。

まず、日本語の破裂音は「有声・無声」という2項対立をなしているのである。つまり、声の有無によって意味が弁別されるのである。例えば、「キン」[kiN]（金）の[k]を有声の[g]で発音すると「ギン」[giN]（銀）になり、意味が変わるのである。それに対して韓国語の破裂音の場合は、日本語のように有声・無声の対立ではなく、発音の強弱、喉頭緊張の有無によって、いわゆる「軟音」「気音（激音）」「硬音」3項対立をなしているのである。例えば、[tal]という一音節語の語頭の

---

<sup>1</sup> 韓国カトリック大学言語文化学部 日語日本文化専攻 助教授

破裂音[t]に気音を強くして[tʰaɪ]のように発音する（ここで [ʰ]は気音を表す）と、탈[tʰaɪ]（仮面）の意味になり、[tʰaɪ]よりも気音をやや弱くして日本語の「で」[de]にちかい発音になると달[taɪ]（月）の意味、さらに、気音をほとんど伴わずに喉頭を緊張して発音すると、こんどは딸[tʰaɪ]（娘）の意味になるのである。

このように、韓国語の破裂音は日本語と異なった特徴をもっているが、韓国人日本語学習者は日本語の破裂音と類似する韓国語の破裂音を代用し、次のような発音上の誤謬をおかす可能性がある。例えば、日本語の「てら」（寺）の語頭「て」[te]の子音[t]を韓国語の破裂音[tʰ]（気音の強い破裂音）、あるいは[t]（気音はあまり伴わないが喉頭を緊張した音）のように発音するおそれがある。

さて、日本語の無声破裂音/p, t, k/は、音環境によって音色が変わる。つまり、語頭では弱い気音が伴い、語中では語頭より気音が弱くなる。そして促音の後では気音がほとんど伴わない。だが、このような気音の強・弱によって意味が区別されることはない。つまり、日本語では韓国語とは違って気音の強弱が意味弁別に関与しないのである。したがって、日本人は気音の強弱に気付かないのが一般的である。ところが、韓国人においてはこのような（語頭では弱い気音が伴い、語中では語頭より気音が弱くなる。そして促音の後では気音がほとんど伴わない）日本語の特徴に敏感なのである。つまり先に述べたように韓国語では気音の強弱が意味弁別に関与するので、韓国人はやや気音が伴う日本語の語頭の破裂音/p, t, k/を韓国語の/pʰ, tʰ, kʰ/（気音の強い破裂音）と同一音として受け取る可能性がたかい。また、日本語の語中や促音の後の破裂音/p, t, k/は韓国語の/pʰ, tʰ, kʰ/（喉頭を緊張し、気音の伴わない音）で認識しやすく、発音でも誤用しやすいのである。

その際、日本語の語頭の破裂音/p, t, k/を韓国語の/pʰ, tʰ, kʰ/（気音の強い破裂音）で発音すると日本人には不自然に聞こえる可能性があり、また語中や促音の後の破裂音/p, t, k/を韓国語の/pʰ, tʰ, kʰ/（喉頭を緊張し、気音の伴わない音）で発音すると語中において促音がはいっているように聞こえると思われる。

次は「語中における無声破裂音」の問題である。韓国人日本語学習者は、例えば「韓国からきました」の「韓国」（かんこく）を（かんごく）「監獄」、あるいは「肩」（かた）を（かだ）・（がだ）、「ことば」を（ことば）（ごどば）のように発音するおそれがある。つまり、日本語の語中の無声破裂音を有声破裂音に発音する例である。

このような誤用は韓国語の影響によるものと思われるが、韓国語では語中の無声破裂子音/p, t, k/が有声音の間におかれると/b, d, g/のように有声音化する特徴があり、そのような発音の習慣が障害要因として働いた結果と思われる。

### 2. 3 語中の「ハ行子音」の問題

韓国人日本語学習者の場合は、例えば「日本語」(にほんご)を(におんご)のように発音するおそれがある。つまり、日本語の語中のハ行子音が弱化して発音されるか、あるいは次の例のようにハ行子音が脱落されるおそれがある。

「日本」[nihon] → 「日本」[nioN]  
「朝日」[asaçi] → 「朝日」[asai]  
「二分」[niφuN] → 「二分」[niuN]

このような誤用の現象は母語の干渉によるものと思われる。韓国語では日本語のハ行子音と類似の音素「ㄷ」[h]が存在するが、次に示した例のようにこの「ㄷ」[h]音が語中の有声音の間におかれると有声音化するか、脱落するのである。

영[jɔŋ] + 향[hjaŋ] → 「영향」[jɔŋ(h)jaŋ] (影響)  
방[paŋ] + 향[hjaŋ] → 「방향」[paŋ(h)jaŋ] (方向)

したがって、例のような韓国語の特徴が日本語を発音するとき影響を与え、上記の「日本語」(にほんご)を(におんご)のように発音する誤用が生じるのではないと思われる。

### 2. 4 日本語の有声音「じ」[dz i]の発音問題

韓国語を母語とする日本語学習者の場合は日本語の[dzikan]を[ɕikan]のように発音する傾向があると言われる。つまり、語頭「じ」[dz i]を「ち」[ɕi]に発音し、まったく別の意味になってしまう例の一つである。このような発音上の誤用は初級・中級者はもちろん、上級者の発音でも観察されるもので、韓国人日本語学習者にとってかなり難しい発音である。

日本語の「じ」[dz i]の特徴や発音方法をみると、子音[dz]は前舌を上歯茎と硬口蓋の間に近づけ閉鎖を形成し息をためた後、破裂と同時に摩擦させて生じるいわゆる破擦音である。また同時に声帯振動をともなう有声音である。

このような語頭での日本語の子音[dz]が韓国語には存在せず、これと類似の「치」[tɕ]や「지」[tɕ]があるが、このような類似の音を代用し、結果的に日本人の耳には「時間」[dz ikan]ではなく痴漢[ɕikan]のように聞こえてしまうのである。

### 2. 5 日本語の長短音の発音問題

日本語の長母音も韓国人にとって難しい発音の一つである。韓国語にも実際には一部の単語が長音・短音によって区別される場合があるが、それは第1音節に限られており、第2音節以下では長・短の対立がない。なお、若い世代では第1

音節でも長母音をほとんど失っており、母音の長さに対する意識が非常に稀薄である。つまり、日本語にあるモーラ（拍）という発音単位が韓国語にはないのである。したがって、日本語「東京」（とうきょう）が（ときょ）あるいは（ときょう）（とうきよ）などのように発音される可能性があり、また、「コーヒー」を（コヒ）に、そして「ビール」を（ビル）のように発音したりするのである。

### 3. まとめ

以上、韓国語を母語とする日本語学習者の母語の影響による日本語の発音の誤用の例を紹介した。外国語を学習する際、学習者は自分の母語の枠組を通して習得しようとする言語を把握しようとする。しかし、学習者の母語と習得しようとする対象言語の間にはお互いに異なる言語体系をもっており、その中に類似性をもっている。それがいわゆる干渉として働き誤用となって現れるのである。したがって、外国語の学習には常に母語の干渉という問題を抱えていると言える。

特に、音声において母語の影響が大きいと言われており、学習しようとする外国語を発音したり、聞いたりする際に、母語にある音声の中から類似の音を選んで代用させようとするのである。したがって、特により効果的な音声教育のためには学習者の母語と習得しようとする外国語との異同を理論的に把握し、指導を行う必要があると思われる。

#### 【参考文献】

- 天沼寧、大坪一夫、水谷修（1978）『日本語音声学』くろしお出版  
梅田博之（1983）『韓国語の音声的研究』螢雪出版社  
小泉保（1996）『音声学入門』大学書林  
国語国立研究所（1997）『日本語と外国語との対照研究Ⅳ 日本語と朝鮮語の対照研究 上・下』くろしお出版

# 韓國人 日本語學習者の 日本語 發音에 대하여

## 이 범 석<sup>1</sup>

### 1. 들어가는 말

外國語를 學習할 때、學習者の 母語가 障害要因으로 작용하는 이른바 母語의 干涉에 대하여는 잘 알려진 바이다. 母語의 干涉은 音聲、文法、語彙 등 각 분야에 걸쳐 일어날 수 있지만 특히 音聲에 있어서의 母語의 干涉으로 인한 誤謬는 경험적으로 알 수 있다. 본고에서는 韓國人 日本語 學習者를 대상으로 母語인 韓國語의 影響으로 인한 日本語 發音의 誤用例를 소개 하였다.

### 2. 韓國語를 母語로 하는 日本語 學習者の 日本語 發音의 誤用例

#### 2. 1 韓國人 日本語學習者가 發音上의 問題点

韓國人 日本語學習者가 日本語를 學習할 때、母語의 影響으로 인해 틀리기 쉬운 發音上의 問題点으로는 다음과 같은 예가 자주 언급되고 있다.

①母音의 無聲化 ②語頭/語中の 無聲破裂音의 問題 ③語頭の 有聲破裂音에 관한 問題 ④「ツ」에 대한 發音 ⑤「ザ行」子音의 發音 ⑥語中에서의 「ハ行子音」의 問題 ⑦促音問題 ⑧長短音의 區別 등이 중 본고 에서는 4개 項目의 예를 들어 설명 하도록 하겠다.

#### 2. 2 日本語의 無聲破裂音의 問題

日本語의 「パ 行子音」/p/, 「タ、テ、ト」의 子音/t/, 「カ 行子音」/k/, 이 3개의 無聲破裂音/p,t,k/는 韓國語를 母語로 하는 日本語學習者에 있어 어려운 發音 중 하나이다.

韓國語에도 日本語의 破裂音/p,t,k/와 비슷한 破裂音이 존재한다. 그러나, 意味辨別에 관여하는 音聲의 特徵이 다르다.

우선, 日本語의 破裂音은 「有聲/無聲」이라고 하는 2項 對立을 이루고 있으며, 소리의 有無에 따라 意味가 구별되어 진다. 예를 들면 「キン」[kiN](金)의 [k]를 有聲音[g]로 發音하면 「ギン」[giN](銀)과 같이, 意味가 바뀌게 된다. 이에 반해서 韓國語의 破裂音은, 日本語처럼 有聲/無聲의 對立이 아니라, 氣音의 強弱, 혹은 喉頭緊張의 有無에 따라 「軟音」「氣音(激音)」「硬音」과 같이 3 項 對立을 이룬다. 예를

<sup>1</sup>Catholic 大學言語文化學部 日語日本文化專攻 助教授

들어, [tal]이라고 하는 一音節語의 語頭 破裂音[t]에 氣音を 많이 동반시켜 발음하면 [t<sup>h</sup>al]이 되어 탈[t<sup>h</sup>al]의 意味가 되고, [t<sup>h</sup>al]보다 氣音を 조금 약하게 발음하게 되면 달[tal](月)의 意味가 되며, 나아가 氣音が 거의 동반되지 않고 喉頭를 緊張시켜 發音하게 되면, 이번에는 딸[t' al](娘)의 意味가 된다.

이처럼, 韓國語의 破裂音은 日本語와 다른 特徵을 가지고 있는데, 韓國人 日本語 學習者의 경우는 日本語의 破裂音과 類似한 韓國語의 破裂音を 代用함으로써, 誤謬의 原因이 되는 것이다. 예를 들자면 日本語의 「てら」(寺)의 語頭「て」[te]의 子音[t]를 韓國語의 破裂音[t<sup>h</sup>](ㅌ), 혹은[t'] (ㄷ) 혹은(ㄷ)으로 발음하기 쉽다.

그런데, 日本語의 無聲破裂音/p,t,k/는 音環境에 따라서 音色이 바뀌는데, 語頭에서는 약한 氣音が 동반되며, 語中에서는 語頭보다 氣音が 약화된다. 그리고 促音 뒤에서는 氣音が 거의 동반되지 않는다. 또한 日本語의 경우는 이러한 氣音의 強弱에 따라 意味가 바뀌지 않는다. 즉, 日本語에서는 韓國語와 달리 氣音의 強弱이 意味弁別에 關係하지 않는 것이다. 따라서, 일상적으로 日本人의 경우는 氣音의 強弱을 意識하지 않는다고 할 수 있다. 그러나, 韓國人의 경우는 이러한 日本語의 特徵에 敏感하게 반응하게 된다. 즉 앞서 설명한대로 韓國語에서는 氣音의 強弱이 意味弁別에 關係하기 때문에 韓國人은 日本語의 語頭破裂音/p,t,k/를 韓國語의 /p<sup>h</sup>,t<sup>h</sup>,k<sup>h</sup>/(ㅌ,ㅌ,ㅋ)의 자음처럼 들리게 되며, 語中과 促音뒤에 오는 破裂音/p,t,k/의 경우는 韓國語 /p',t',k'/(ㅍ,ㅊ,ㅋ)의 자음처럼 인식하기 쉬우며 발음에서도 代用하기 쉬운 것이다.

이처럼 日本語의 語頭破裂音 /p,t,k/를 韓國語의 /p<sup>h</sup>,t<sup>h</sup>,k<sup>h</sup>/로 發音하거나, 語中이나 促音뒤에 오는 破裂音/p,t,k/를 韓國語의 /p',t',k'/로 발음하게 되면, 日本人에게는 매우 강한 어조로 말하는 것처럼 인식될 수 있다.

다음은 「語中에 있어서의 無聲破裂音」에 관한 문제이다. 韓國人 日本語學習者의 경우, 예를 들어 「韓國からきました」에서 「韓國」(かんこく)을 (かんごく) 「監獄」, 혹은 「肩」(かた)를 (かだ)/(がだ), 그리고 「ことば」를(ことば)/(ごどば)처럼 발음하는 경우가 있다. 즉, 日本語의 語中の 無聲破裂音を 有聲破裂音으로 發音하는 예라 할 수 있다.

이러한 誤用은, 韓國語의 경우는, 語中の 無聲破裂子音 /p,t,k/가 有聲音 사이에 놓이면 /b,d,g/와 같이 有聲音化하는 特徵이 있어 이러한 발음상의 習慣이 작용한 結果라고 여겨진다.

### 2. 3 語中の「ハ行子音」에 관한 問題

韓國人 日本語學習者의 경우, 예를 들면 「日本語」(にほんご)를

(におんご)와 같이 發音하는 경우가 있다. 즉, 日本語의 語中の ㄸ行子音が 弱化되거나 다음 예와 같이 탈락하는 경우이다.

「日本」 [nihoN] → 「日本」 [nioN]  
 「朝日」 [asaçi] → 「朝日」 [asai]  
 「二分」 [niφuN] → 「二分」 [niuN]

이러한 誤用現象은 母語의 干涉에 의한 것으로 추정 되는데 韓國語에서는 日本語의 ㄸ行子音과 유사한 音素 「ㅎ」 [h]이 존재하며 다음에 들은 예처럼 「ㅎ」 [h]音이 語中の 有聲音 사이에 놓이게 되면 脫落하게 된다.

영[joŋ] + 향[hjaŋ] → 「영향」 [joŋ(h)jaŋ](影響)  
 방[paŋ] + 향[hjaŋ] → 「방향」 [paŋ(h)jaŋ](方向)

이와 같은 韓國語의 特徵이 日本語를 發音할 때 影響을 주어 「日本語」(にほんご)를 (におんご)와 같이 발음하게 되는 것이다.

#### 2. 4 日本語의 有聲音 「じ」 [dzi] 의 發音問題

韓國語를 母語로 하는 日本語 學習者의 경우, 日本語의 [dzikan]을 [ɕikan]과 같이 발음하는 경향이 있다. 즉 語頭 「じ」 [dzi]를 「ち」 [ɕi]로 發音하여 전혀 다른 의미가 되어 버리는 예라 하겠다. 이러한 發音上의 誤謬는 初級/中級者는 물론 上級者의 發音에서도 觀察할 수 있으며 韓國人 日本語學習者에 있어 매우 어려운 發音이라 할 수 있다.

日本語의 「じ」 [dzi] 의 特徵과 發音方法을 보면 子音 [dz]는 前舌을 윗 잇몸과 硬口蓋 사이에 붙여 閉鎖를 만들어 鼻息을 가둔 다음, 摩擦과 同時に 破裂시켜 내는 破擦音이다. 또한 동시에 聲帶振動을 동반하는 음이다. 이처럼 語頭에서의 日本語子音 [dz]는 韓國語에는 존재하지 않으며 그와 유사한 「치」 [tʃ<sup>h</sup>], 「지」 [tʃ] 가 있어 이 유사한 음을 代用함으로서 結果的으로 「時間」 [dzikan]을 「痴漢」 [ɕikan]으로 발음하게 되는 것이다.

#### 2. 5 日本語의 長短音의 發音問題

日本語의 長母音도 韓國人에게 있어서는 어려운 발음중 하나이다. 韓國語에도 실제로는 一部 單語의 의미가 長音과 短音에 의해 구별되는 예가 있지만 그것은 第1音節에 한정되어 있으며, 第2音節 이하에서는 長/短의 對立이 없는 것이 일반적이다. 한편, 젊은층에서는 第1音節에서조차 長母音이 상실되어 있으며 長音/短音에 대한 意識이 거의 없다고 해도 과언이 아니다. 따라서 日本語에 있는 拍이라고 하는 發音單位에 둔감할 수밖에 없다. 그결과, 日本語의 「東京」(とうきょう)를(ときょ)혹은(ときょう)(とうき

ょ) 등과 같이 발음할 가능성이 있으며 또한 「コ-ヒ-」를(コヒ)로, 그리고 「ビール」를(ビル)와 같이 발음 할 소지가 있는 것이다.

### 3. 마치며

以上、韓國語를 母語하는 日本語學習者の 母語의 影響에 의한 日本語發音의 誤用에 관한 예를 紹介하였다. 外國語를 學習할 때, 學習者は 母語의 테두리 안에서 習得하려고 하는 外國語를 파악 하려는 경향이 있다. 그러나 일반적으로는 學習者の 母語와 習得하려고 하는 外國語는 서로 다른 언어 체계를 가지고 있으며 그러한 점이 干涉으로 작용하여 오류로 나타나게 되는 것이다. 따라서, 外國語學習에는 항상 母語의 干渉이라고 하는 問題를 안고 있다고 할 수 있다.

특히 效果的인 音聲教育을 위해서는 學習者の 母語와 習得하려고 하는 外國語의 相異點을 理論적으로 把握 說明한 다음 指導하는 것이 바람직 하다고 사료된다.

#### 【参考文献】

- 天沼寧、大坪一夫、水谷修 (1978) 『日本語音声学』 くろしお出版  
梅田博之 (1983) 『韓國語の音聲的研究』 螢雪出版社  
小泉保 (1996) 『音声学入門』 大学書林  
国語国立研究所 (1997) 『日本語と外國語との対照研究Ⅳ 日本語と朝鮮語の対照研究 上・下』 くろしお出版